

忘却のメカニズム

—芳賀檀をめぐる言説—

高 田 里恵子

「芳賀という妙な人物」

かつてそれなりに読者をもった文筆家が、何かをきっかけとしてまったく忘れ去られるということがある。しかも、忘れられて当然であると誰もが納得できる。つまり、忘却は、よりドラマティックな再発見のための道具立てでもないというわけだ。こうした場合は、なぜ彼があの時たまたま活躍できてしまったのか、それを探ることだけが、彼を観察することの意義をかりうじて提出してくれるだろう。本稿で取り上げるドイツ文学者芳賀檀（1903～1993）とは、そのような人物である。つまり芳賀檀には残念ながら再発見したり再評価したりする価値はほとんどない。しかし、芳賀が活躍し得た短い期間は注目に値する。

芳賀檀は、昭和十年代に一種の反近代主義やナショナリズム思想によって若いインテリの読者を獲得した日本浪漫派の批評家の一人であった。この場合重要なのは、読者が若いインテリたちだったということ、つまり、受容者がある一定の年齢層、階層に属していたことである。

すでに橋川文三の記念碑的著作『日本浪漫派批判序説』が示していることだが、日本浪漫派という特異な精神史的現象についての研究は（ただし、のちに述べるように橋川にとって、日本浪漫派とはほとんど保田興重郎ひとりを指しているのだが）、日本ファシズム期における、あるいはもっと広く言っ

て近代日本における中間層，とりわけインテリ層の在り様をあぶりだすことになるだろう。じじつ橋川の考察は，日本のインテリ層は「気分的には全体としてファシズム運動に対して嫌悪の感情をもち，消極的抵抗をさえ行っていたのではないかと思います。これは日本のファシズムにみられる非常に顕著な特質であります，翼壯の組織もサラリーマン層をつかまえることには，ついに成功しなかった」¹⁾（傍点原文）あるいは「軍国主義にたいする勇敢な抵抗を行なった知識人はすくなくはなかったけれども，知識人が狂熱的な皇国イデオロギーにコミットした程度もナチ・ドイツに比べて低かった」²⁾と言う丸山真男の日本ファシズム研究に欠けていた部分を補うものとなっている。橋川が自分の世代の問題として振り返っているように，右翼的日本主義は若いインテリたちを魅きつけなかったが，日本浪漫派が繰りだした屈折した国粹思想は彼らを容易に魔術にかけることができた。

戦時中の芳賀檀のドイツ文学者としての仕事は，ナチスやヒトラーの称賛ということを別にすれば，カロッサとリルケの紹介であった。そして，この芳賀の得意先が，加藤周一が怒りと批判を込めて「新しき星董派」と呼んだ無力で能天気な，高学歴の若者たちだったのである。

カロッサを携えて音楽会に集った都会の星董派を見よ。彼等が形のよい唇を綻ばせてベートーフェン（Beethoven）は荘厳ですねと云う時の，勿体振った表情を見よ。安全な文化を享樂し，序でに自尊心を満足させている青年の愚劣さと，自己の社会的役割を理解せず，支配階級の方を，——それが軍人であろうと地主であろうと，彼等のために自ら苦しみながら，しかも彼等の方を向いて尾を振っている青年の卑屈さと，要するに，フォックステリアの如く小綺麗で低脳な都会の星董派の悲惨な喜劇が，遺憾なく，歴然と，見るも無惨に生々しく，現れているであろう³⁾。

「一九三〇年の世代，没落する中産階級のエリート」³⁾たちに対する加藤の口調はこのように厳しい。加藤周一はまた，こうした若者のあいだでのり

ルケやカロッサの流行が「消極的な戦時体制批判を反映し、現実逃避の道具」⁴⁾であった一方で、その代表的紹介者である「芳賀は日本浪漫派とともに歩んで、戦争協力に徹底していた」⁴⁾ことを指摘する。もちろん、こんな矛盾なぞ、今だって日本では珍しくはないが（もっとも、現在の日本では文学や学術書の翻訳が決定的な影響力をもたなくなっているのです、カリスマ的紹介者も存在しなくなったが）、時代の苛酷さは、この日本的で本来は無害な「いいかげんさ」を悲惨なものに変えた。加藤周一は1919年生まれ、橋川文三は1921年生まれであり、ともに「わだつみ」世代であることを、ここで付け加えておこう⁵⁾。

明治末期以来、つまり福沢諭吉的な幸福な啓蒙期が過ぎ去って以来、この国のインテリ層が抱えてきた問題が、昭和の戦争期に、ある世代を通して最も鮮明に姿を現わした。それ自体としてはあまり意味がない芳賀檀研究も、日本のインテリの問題、つまり、いわゆるインテリ層と体制との関係という問題に繋がっていくはずである。それは、一義的に体制への追随とか反抗という言葉で括ることはできない。先の丸山真男の言葉がさまざまな批判を越えて今なお有効性をもっているとしたら、その分析がファシズム体制のなかのインテリたちの在り様だけではなく、現状一般とインテリとの関係にも適用しうるからであろう。筆者の関心は、最終的には、インテリ（と今ここで仮に呼んでいる層）の再定義を含めて、この近代日本の問題に在る。

しかしながら、本稿ではまず、日本浪漫派のなかでもかなりの変人であったらしい「芳賀という妙な人物」（橋川文三）の、ある「事件」を探ってみたいと思う。この「事件」は、芳賀が保田輿重郎ほどではないにしろ当時の若者を魅了したことと、戦後ほとんど黙殺されていったことと両方に関係しており、芳賀檀の周辺を明らかにするためには、ぜひ一度は目を通しておく必要がある。もっとも、先取りして言うておけば、「事件」そのものはまったくの茶番劇にすぎない。いや、茶番にすぎないという点でのみ、かろうじて資料的価値をもつのである。

「事件」調書その1

「日本浪漫派の騎士」芳賀檀は、敗戦後はほとんど忘れ去られた。というより、忘れられたこと自体を忘れられるはずだった芳賀の名前が、繰り返えし再発見され再評価される保田興重郎との関係においてのみ言及されるという、芳賀にとってより惨めな事態になった。まずは、最も古い、つまり最も昭和20年8月15日に近い言葉を引用してみよう。芳賀檀は、保田興重郎の引き立て役として登場させられている。

あの頃保田興重郎ほど待望されていた人間はない。彼が登場すればそれで壮大なる喜劇の主役は揃うのであった。チイドやヴァレリーのエピゴーネンが自意識やら知性やらでもぞもぞしている間に「コギト」一族が軍楽とナチ節入りでにぎやかに押出して来た始めのうちはあの好色漢芳賀檀教授が悲壮な顔をつっぱらせて自ら英雄の役を演じて見せたけれど、たとえあの喚き声において又雌に対する精力において鶏小舎の中でなら優にどの雄鶏にも比肩する英雄でありえたにせよ、世界大戦に突入しようという刹那の日本帝国主義のイデオロギイを代弁するには余りに人が好すぎて単調だった。山岸外史にしたところで、平凡陳腐なことを肩を怒らせてどなるのが天才のしるしだと信じるロマン主義者にすぎない。保田興重郎こそがバカタンはもちろんあの悪どい浅野晃や亀井勝一郎さえ到底足許にも寄りつけぬ、正に一個の天才というべき人間であった⁶⁾。

これは、『文学時評』1946年3月15日号に載った「文学検察」の一部、「保田興重郎」の項の冒頭である。ここでは戦争責任を負うとされた文学者が毎回、数人取り上げられ断罪されたわけだが、今となっては「文学検察」の文学史的意味においてより注目に値するのは、被告人ではなく検察官のほうかもしれない。上の引用の筆者である杉浦明平などは、そのよい例であろう。日本浪漫派とりわけ保田興重郎に対する、杉浦の激しい憎悪、戦後最初に表明された、この批評的激怒は、橋川文三をして「戦争前一時保田にいかれた

覚えのある私などに、戦慄的な印象を与えた」⁷⁾ (傍点原文) と言わしめた。その橋川も「私たちにとって、日本ロマン派とは保田輿重郎以外のものではなかった。亀井勝一郎、芳賀檀などは私たち少年の目には、あるあいまいなジャーナリストにすぎなかったし、浅野晃以下にいたっては、殆ど問題にもされなかったと思う」⁸⁾ と言い、日本浪漫派の批評家たちのなかで保田輿重郎が特権的な位置を占めていたことを指摘する。芳賀じしん、当時保田輿重郎に何度かオマージュを捧げており、保田の従者と言われても仕方がないほどの影響を、この年下の友人から受けていた。芳賀檀は活躍していた頃からすでに二番手の悲哀から免れていなかったわけだが、それは芳賀が自覚していたことである。芳賀檀も『文学時評』1946年2月15日号の「文学検察」で、つまり保田輿重郎が取り上げられた号より一つ前の号で、佐々木基一によって告発された。ともかく芳賀は敗戦直後の「文学検察」に単独で登場させてもらえるほどの人物ではあったのだ。

ナチス治下の独逸から還って来た芳賀は、ゲッベルスを好んでゲッベルス博士と呼んだような、当時のわが国のジャーナリズムによって、方々に担ぎ出され、そこでこの本質的には唯美主義と指導者意識とを縋いませにした貴族主義者は、精神的墮落と美の危機に立っていた戦争中のわが国に、云わば美の領域におけるヒトラー、即ち彼自身の言葉を借りて云えば、「創造の種族」「立法者」「決断者」「審判者」の出現を催促したが、わが国にヒトラーが出現しなかったと同じく、そのような種族も出現しなかった。
(中略)

さて、戦争中のヒトラーの出現を待望して果たさなかった芳賀は、ヒトラーの敗れ去ったいまなお、例えば「創造」十月号の論文で、敗戦後の日本社会の混乱を救うのは断固たる個人の司令以外にはあり得ないと書いている。そして国家を云うよりも先に、先ず民衆は民衆でなければならぬ、とも書いている。永久に支配さるべき民衆と、支配する断固たる個人—芳賀が望むものが何かは明瞭だ⁹⁾。

この佐々木基一の口調からは、それがファシスト（？）と呼ばれるにしろ、それなりに首尾一貫した信念と思想をもつ人物が浮かび上がるだろう。さらに、おそらく芳賀じしんも自負していたであろう、保田興重郎との差異も明らかにする。

芳賀は、日本浪漫派として活躍していたころ、東京帝国大学独文科の副手であり、さらに昭和14年からは母校の三高の教授となった（ただし、杉浦明平に「あの好色漢芳賀檀教授」と言わせてしまうような不始末のせいで三高をすぐに退職しているが）。ドイツ帰りの芳賀が「ゲッベルスを好んでゲッベルス博士と呼んだような、当時のわが国のジャーナリズムによって、方々に担ぎ出され」という表現は当時の状況をよく伝えている。「芳賀檀教授」は、ナチス・ドイツが学問と文学を程よくまぶされて称賛されることを求めたジャーナリズムにとって都合のよい人材であった。

さらに芳賀にはベルトラムという立派な後ろ盾がいた。芳賀は、昭和4年の春から、ナチス政権成立直後の昭和8年までドイツに留学しているが、その折りとりわけケルン大学のエルンスト・ベルトラム教授に決定的な影響を受けたということになっている。何しろ、芳賀のすべての自著の扉には「エルンスト・ベルトラム教授に捧ぐ」とわざわざ書いてあるくらいなのだ。ベルトラムは、ゲオルゲ派の詩人（正確に言えばゲオルゲ派の準会員）で、カロッサやトーマス・マンの友人であり、日本でも、やはりゲオルゲ派のグンドルフと並んで、正統派ドイツ文芸学の大家として流通していた。ベルトラムの名は、先ほど言及した加藤周一の「新しき星莖派」批判にも、「グンドルフ Gundorf の『ゲーテ』は学問を代表し、ベルトラム Bertram の『ニーチェ』は情熱を代表してこの輪舞（リルケ・カロッサ・ヘッセの流行……引用者）に加る。そして、軍国主義者がドイツ人を模倣しながら、日本は神国であると唱えたのと全く同じように、時代の星莖派は、ドイツ人の教師を崇めながら、又屢々『万葉』や『新古今』の裡に青春の歌を求める」¹⁰⁾ というように、明らかな日本浪漫派・芳賀檀との連関で登場してくる。因みにベルトラムは、戦後、ナチスへの加担を問われて占領軍によってケルン大学を追放

された。

さらにもう一つここで芳賀檀の「血統」の由緒正しさに触れておかねばなるまい。「血統」とは、芳賀が保田とともに好んで使用した日本浪漫派用語である。保田興重郎や亀井勝一郎が地方の名家の出身であったこと、それが彼らの思考形態、日本や伝統への回帰の様態と無関係ではなかったことはしばしば言及されてきた。亀井の場合は、出身階層への反発と左傾そして転向という物語が、保田の場合は、奈良の桜井の豪族という血筋に対する誇りの物語が提示されるのである。語るべきほどの左翼体験を持たなかった芳賀檀は保田興重郎のほうの物語を模倣した。

保田が生まれ故郷と古典の舞台との結びつきを、自己の（イロニーを含めた）特権化のためにもち出したように、芳賀は父・芳賀矢一東京帝国大学国文科教授と、漱石や鷗外をはじめとする代表的な明治の人物が訪れもした父の家で過ごした幼年時代を特権視する¹¹⁾。俗な表現で言ってしまうと、自分は生まれながらにしてちょっと違うのだという意識である。

芳賀檀は、矢一の『日本人』という著書を、「創造的自己批判の文学」と題された自らの解説つきで昭和14年に復刻している。檀の解説の題名は矢一の方法を称えながら、単なる自己賛美・西欧排斥にすぎない当時の日本主義の流行を暗に非難しているのである。芳賀は他の場所で「国体的な方法論や伝統の生育のことを書いたら自由主義者からも右翼からも弾圧すると言って叱られた」¹²⁾と言っているが、保田興重郎と同様、真正日本主義者には憎まれており、またこれらの者たちとの差異化を試みている。矢一への賛美の言葉も、その試みのひとつだ。

最も多く西欧の感化をうけ、明治時代の文学者の中でも、最も進歩的であった矢一が、正に彼自身の上に日本の性格と西欧の理念とが決して矛盾しないこと、西欧の学は必ず日本を豊かにするだけであることを見たのであった。寧ろ自覚した科学的批判と集中とが、日本の民族の無自覚な、逆流する創造力を解放し、確立し、展開するのを助けることを体験したので

あった。自覚した批判と、民族の生、本能の相互作用こそ世界を変革する力であるということを¹³⁾。

具体的に言うと、勤皇歌人と言われる橘曙覧門下の歌人でもあった神官芳賀真咲を父にもつ矢一が、自らの出自にも関わる伝統の国学と、ベルリン留学によって仕入れたドイツ文献学とを結びつけ国文学を革新した、ということである。そして父・矢一のこの姿は当然ドイツ文学者の息子・檀の姿であり、さらに日本浪漫派の方法論でもある、と芳賀は言いたいのである。日本浪漫派が「自己批判」すなわちイロニーをドイツロマン派から受け継ごうとしたことについては、いまさら言及するまでもあるまい。自分は「血統」から言っても単純な反近代主義者ではないのだ、と。

もっとも、残念ながら芳賀檀の言葉じたいは「余りに人が好すぎて単調」(杉浦明平)でイロニーを欠いた自己賛美である。この芳賀の弱点は、芳賀をめぐる言説の定番となった。新しいところでは、保田輿重郎へのオマージュとも言えるべき著作を二冊だしている桶谷秀昭が次のように言っている。

「文学界」十二月号(昭和十五年)は「日本を賛へる号」として、岸田国土以下、芳賀檀、浅野晃、小林秀雄、保田輿重郎といった批評家の文章を載せている。岸田と小林をのぞいて他の三人は日本浪漫派の批評家であるが、芳賀以外だれも日本を賛えてなどいない¹⁴⁾。

同じような軽侮を含んだ調子が橋川文三の『日本浪漫派批判序説』にも登場する。

保田の初期評論群の中に、後年のいわゆる「日本ロマン派」として知られるもの一狂熱的国粹主義の意味を感じることは容易に自明なことがらではない。むしろ日本ロマン派全体として見ても、そこに見られる数々の排外主義侵略主義の含みというものも(芳賀檀のような奇型的表現をのぞい

て) あらわに現実の言葉で説かれたものではなく、模糊とした心情の言葉で語られたものであった¹⁵⁾。

どうやら、芳賀は日本浪漫派の「綱領」に馬鹿正直すぎたとみえる。さらにもう一つ、橋川を引用しておこう。芳賀檀は今ではすっかり忘れられてしまっているのですが、その芳賀がどのような人物だったかを紹介するために、これほど格好の文章はない。というのは、ここでもち出されるのは石原慎太郎であり、石原への嫌悪はわれわれにはなじみのものだからである。

石原という作家のことを考えると、ぼくは、奇妙に日本ロマン派の騎士芳賀檀のことを連想する。この二人の間にある精神史上の相似性は、ほとんどある種の歴史的なスキャンダルを感じさせるほどである。それは一種の恥しらずな祖先返りのようにさえぼくには思われる。敗戦を境目にして前後に十年の地点に、それぞれ陳腐なロマンチズムに身づくろいした二人のドン・キホーテがつたっている！

この二人は、何よりも正系のロマンチストらしく、F・シュレーゲルらしい官能礼賛と肉体の神秘化において、論理とレトリックの粗野と虚飾性において、「育ちの良さ」に関連する愚直さにおいて、さらに、これまた正統派ロマンティックに共通するイロニイの欠如において、大へんよく似ている。ただ芳賀がゲオルゲ・グルッペやドイツ・ロマン派の言葉で語り、石原がアメリカ社会学風の言葉で語ることがあるという差異はあるが、「青年の特権である肉体主義、肉体的宇宙観の放埒、実感的情念的行動力を振り廻すこと」(石原)の礼賛と、「もっと青春のもつ本能の正しさを、寧ろ肉体のもつ正義を信じたい」(芳賀)という「神聖な厚顔さ」(ヘーゲル)において、両者は全く等価である。

芳賀においては、この肉体礼賛は、排外的民族主義を媒介として、生理的に老廃した中国にたいする「若い日本」の侵略の正当化へと発展するし、石原においては、その「実感的情念的行動力」は、政治的危機感を媒介と

して、国務大臣中曾根康弘と独裁政治の礼賛へと傾斜する。「深い夢をはらんだ強い政治」への憧憬こそ、かつて昭和十年前後の「時代閉塞」状況において、日本を民族主義的ロマンティズムの破滅過程にみちびいた生理的衝動にほかならなかったが、石原がその発想の歴史的無効性に無知なことはおどろくべきである。それは、石川啄木より古く、明治初年の放らつな青年たちよりも陳腐であることが、全く意識されていないのである¹⁶⁾。

この橋川文三の批判は余りにも的確であるために、反対に石原慎太郎や芳賀檀および彼らのファシズム待望論の魅力をも説明してしまう。なぜ、一方では大いに嫌われる石原あるいは芳賀が、他方では多数の信奉者的な読者を獲得できるのか、橋川の文章ははしなくも伝えている。「時代閉塞」状況とは、陳腐な存在を、そうと気づかずに許してしまう、それどころか感心してしまうという状況ではないのか。

しかし、ここで重要なのは、芳賀檀がいくぶん小馬鹿にされる形で引き合いに出されるのが当然と見なされていることである。桶谷秀昭の場合もそうであるし、後に示すが実は何よりかつての日本浪漫派の仲間たちが芳賀をそのように扱っている。そして、あの「事件」の存在なくして、こうした芳賀に対する共通理解は生まれなかった。

「事件」調書その2

さて、その「事件」であるが、やはり橋川文三のコメントから始めよう。

橋川は、ドイツロマン派と日本浪漫派を比較しつつ、両者がそのきわめて反体制的なあるいは革命的なマニフェストにもかかわらず、実際の成果を欠いていたことを認めている。

あたかもドイツ・ロマン派が、正当にフランス革命に対する「ドイツの回答」と呼ばれうる反面をもつとともに、その革命行動の成果はわずか二、三のサロンのスキャンダル、コッツェブー殺害、ニコライ老人の粉碎といっ

たていどのものであったと皮肉られるように、わが日本ロマン派においても、そのフランス革命・ソヴィエト革命・満州事変にたいする「回答」の实际的帰結は、(もし同じ調子でいえば) 保田についていわれる「スパイ活動」と芳賀檀による文壇的スキャンダルくらいのものであったといえるような一面をもったのである¹⁷⁾。(傍点原文)

「スパイ活動」というのがカギ括弧付きで引用されているのは、それが、日本浪漫派の矮小化のために使われる一種の中傷だからである。杉浦明平は、「思想探偵として犬のように鋭敏で他人の本の中に赤い臭をかいではこれを参謀本部第何課に報告する仕事」(「文学検察」)こそが、保田興重郎の行ったことだと非難するのだが、別に何か証拠があつての発言ではない。従つてここで重要なのは事実関係ではなく、日本浪漫派が、有名な「日本浪漫派広告」¹⁸⁾に見られるように「現状反抗」を高らかに謳つておきながらその実ファシズムとか軍国主義とか呼ばれる体制の走狗になっていた、という杉浦の批判の根本姿勢だろう。また、橋川自身が『日本浪漫派批判序説』を書くきっかけを作ってくれたものとして挙げている中野重治の文章「第二『文学界』・『日本浪漫派』などについて」も、この点を強調していた。「なぜ和泉式部へ、万葉へと行った『高貴な』精神が、軍国政権との抱合い心中として繁栄した商業主義文学世界にあれほど色目を使い、最も下等な中河与一や林房雄と抱合い心中をとげたか」¹⁹⁾。

橋川文三は、こうした日本浪漫派批判の姿勢を受け継ぎつつ、保田の「スパイ活動」と芳賀のスキャンダルを並べてみせている。つまり、芳賀のスキャンダルとは、芳賀の「現状反抗」の内実の驚くべき低俗性を証明するものであり、そのうえ保田スパイ説と違って芳賀のスキャンダルは明白な事実である。それは、その下らなさのわりには、いや、まさしくその低級性ゆえに日本浪漫派の根幹を脅かしてしまうだろう。しかも、ここで問題となるは「現状反抗」の精神がファシズム的心性へと導かれるということでもない。むしろ、芳賀のファシストとしての威光をも奪ってしまうのである。橋川の世代

が「純粹ファシスト」としての保田輿重郎に「いかれた」のは、「時代閉塞」状況にあって最後の「現状反抗」（たとえば彼ら独特の反近代主義）の可能性をもっていたからではなかったか。橋川は「芳賀檀による文壇的スキャンダル」のところに次のような註をつけた。

最近芳賀檀は「学閥との闘争三十年」という文章を書いた。同じ主題の陽画に相当するものが『古典の親衛隊』（昭和十四年）の冒頭に描かれている。それは高貴なる日本の騎士芳賀が、同じくゲルマンの騎士ベルトラムに邂逅する絢爛な魂の絵巻物として記されているが、彼と此が同じ素材から作られていることを比較確認することによって、なによりも鮮かに芳賀という妙な人物の透視像がえられるであろう²⁰⁾。

ここで挙げられている「学閥との闘争三十年」という文章が、われわれが「事件」と呼ぶものである。この文章は『新潮』の昭和32年5月号（116頁～121頁）に掲載されたのだが、こういう奇妙な文章が書かれるにいたった事情は少々入り組んでいるので順をおって説明しておこう。

昭和30年の6月芳賀は日本ペンクラブの代表としてウィーンのパン国際大会に出席する。その席で芳賀は、1957年（昭和32年）の大会を東京で開催することを独断で提案し、それが決まってしまう。すったもんだの末、日本ペンクラブでも東京大会の開催を引き受けることを承知するのだが、その際芳賀の独走的スタンドプレーが激しく非難されたのは当然であろう。しかし、芳賀のほうは被害者意識のかたまりとなって、その折りの恨みつらみを『新潮』の昭和32年3月号に書き綴った。「我れドン・キホーテに甘んず」（53頁～59頁）というのが文章の題名であるが、ドン・キホーテは、芳賀が日本浪漫派時代に好んで使った言葉で、ここには肯定的な意味が込められている。ドン・キホーテの「純情」（これも芳賀用語²¹⁾である）は、エラスムス的な卑怯な傍観と対比されるのである。「古典の親衛隊は何よりも傍観し、観照する者等を仇敵とする」²²⁾と若い芳賀は宣言したものだだった。

「我れドン・キホーテに甘んず」にはまた、ボンを訪れたさいの、こんなエピソードも書かれている。

ユダヤ人の迫害の事実について、私は到底信じられなかったので、外務省に訊きに行った。事実だったことをきいて、外務省の中で手放しに泣いてしまった。欧州のニヒリズムの深さに、今更驚いたのである。併し、カロッサやカザックや、ヘッセのような人々に会い心慰められ、こういう快癒者もいることに深く感動した。

かつて芳賀がヒトラーの賛美者であったこと²³⁾、あるいはカロッサをナチス文学の第一人者として描いたことは上の発言とけっして矛盾しない。ムッソリーニの窮地を救ったヒトラーの行動を称え、「身のまわり全て不信と反逆に充ちたこの混乱と危機の只中に示された男としての友情の無限の深さこそまことに男をして泣かしめるものではあるまいか。(中略)それは正に一篇の古典の詩の行為であり、英雄の詩の実現であった」²⁴⁾と言った芳賀檀、ナチスとともに歩むカロッサを、この世界を「回癒する人」²⁵⁾(当時は快癒ではなく「回癒」が芳賀用語だったのだが、これは他動詞である)と呼んだ芳賀檀が健在であることを、上記の芳賀の言葉は教えてくれるだろう。芳賀にとって世界はつねに病んでおり、「危機」(これも芳賀用語)の只中にあり、だから救済者としての文学者が求められている。芳賀の眼には「ヒトラー」そのものが「文学」と化していることに注目してほしい。

「ドン・キホーテ」は日本浪漫派の一員だったころの芳賀を思い出させるのに十分な文章であった。『新潮』が出た翌月の『文学界』のコラム氏(6頁)は芳賀を徹底的にこき下ろす。そして、そのコラムで、芳賀檀が、東京大会の開催がようやく可決された日の夜に新宿で起こしたという乱闘事件のことが暴かれたのである。

新宿で芳賀と同門のドイツ文学者たちが酒を飲んで楽しんでいる所へ、突

然芳賀がなぐり込みをかけたところを目撃した。それは文化人同士の集りにはちょっと見られぬ情景であった。今更戦時中の彼の言行をあげつらうことはないが、彼の戦後の文章をみても彼が何十年かのズレをもつロマンチストであり、依然変らぬファシストであることを知って戦慄を覚えるのである。

この非難の文章を受けて「学閥との闘争三十年」は書かれた。芳賀が「なぐり込みをかけた」相手は、当時の東大独文科の教師たち「相良守峯，佐藤晃一，手塚富雄，登張氏その他助手ら六，七人」だったのである。

なぐられた事から言えば，一対七だから，私の方が多かったろう。而もあの十秒か二十秒の出来事は，瞬間的ではあったが，私が東大を出てから三十年間にわたる東大の学閥との悲慘な抗争に最後の幕を下ろしたものであった。私を死にまで追いつめた学閥の詐欺と暴行に対して言わば私の不幸な学者としてのこれまでの生涯の一切の決算をつけたものであった。（中略）

新宿での出来事を「指して」非難された以上，私は正当防衛として好むと好まぬに拘らず，その以前を語らなければならない事になった。一つの出来事は大きな社会的現実の結果であったからだ。この様な無形の法廷に立たねばならないことは自身を悲しく思うが，いくらかでも若い学徒の参考になれば幸である。あれは東大学閥に対する私の最後の訣別であり解放であった訳だが，今では余りにも遅すぎた。まず三十年以上の学的奴隷の忍従の歴史を語らねばならない。

さて，いよいよ芳賀檀に語ってもらう前に，もう一つ，「学閥との闘争三十年」に言及している文章を引用しておこう。『共同研究 転向』の日本浪漫派（とりわけ亀井勝一郎）を扱った論文の一節なのだが，有名な書名がすでに示しているように，日本浪漫派の成立が，転向の季節のあとに広がった，青年たちのデスパレートな心情と関係しているという橋川文三の説を踏襲し

ている²⁶⁾。

芳賀檀においては、それ（反権威・反官僚主義……引用者）は官学、文壇、進歩的文化人に対する反感として今日まで生き続けている。彼の孤高の意識の支えとなってきたものは、自分を欺き、裏切り、堕しめたものへの猜疑と憎悪と憤怒であり、「一切の祝典の只中に、私はひとり迷ひ込んだ乞食の如く貧しく慄へた。」という孤独感であった。

同じ孤独の苦痛を太宰、亀井の場合のように自己の内部に原因をもつものと考えず、外の原因によるものと芳賀は考える。自己はいつも心情における被害者である。そして「たとえ破滅が目の前にあったとしても、其の只中に乗り込む以外に何の生、何の方法」もないというデスペレートな気持が生まれる。しかしそれは、同じデスペレートな心情でありながら、太宰のとった自己否定の方向〈下降指向〉とは対照的に〈上昇する意志〉（芳賀）〈上部へ賭ける事〉であり、また自己肯定から同じく生を求めるものでありながら、破滅を避け、生と健康さを求めた亀井ともまた異なるものであった。太宰の行ったような自己破壊も亀井の行なったような自己保存のいずれの衝動も、芳賀はもたなかったように思える。その意味で芳賀はファシズム時代に対応する美意識としての日本浪漫派の地の部分を、最も素直に表現しているといえるかもしれない。橋川文三によって『古典の親衛隊』の冒頭部分がそのまま「学閥との闘争三十年」と重なり合うことが指摘されているが、芳賀檀は、日本浪漫派の中でも、自己の個人的心情をむきだしのままそれに思想的表現を与え、日本の頹廃をそのまま自己の頹廃の中に示した人と考えられる²⁷⁾。

ここで、亀井勝一郎と太宰治を比較の対象としてもち出しているのは見事である。彼ら二人の「デスペレートな心情」、孤独感、そしてそこからの回復あるいは破滅の物語はファシズムを生き延び、戦後にこそ多数の共感者を見出した。それは普遍的な青春の物語たりえた。それに対して、芳賀の「被

害者」意識はもはや何の魅力ももち得ないのである²⁸⁾。

しかし、この上記の文章は実は芳賀檀の「事件」の本質には触れていない。「橋川文三によって『古典の親衛隊』の冒頭部分がそのまま『学閥との闘争三十年』と重なり合うことが指摘されている」と言っていながら、その『古典の親衛隊』の冒頭部分にある「一切の祝典の只中に、私はひとり迷ひ込んだ乞食の如く貧しく慄へた」という言葉が、それなりに詩的な響きを保つように引用されているからである。「祝典」や「乞食」や「破滅」は一種の比喩に聞こえ、芳賀が「孤高の意識」をもった純粹ファシストのようにも感じられる。橋川に従って、この部分を「学閥との闘争三十年」のなかの具体的な言葉に翻訳してみることが重要なのである。「祝典」とは、実際にフライブルクの町の祭りを指していた。

が運命の日はきた。丁度その日はフライブルクの祭りの日で、市は美しく花と旗に飾られていた。日本から待ちに待った木村教授（木村謹治東京帝国大学教授……引用者）からの手紙が来た。が、それはただ簡単に、「東大内部の情勢が変わったので君を教授に入れる可能性はなくなった」と書いてあるだけだった。私は自分の眼を信じる事が出来なかった。初めて私は大地が、世界の一切が足下に揺らぐのを感じた。人生の深淵にのめり込んでしまったのだ。その日以来二度と私は幸福という事について考えた事はなく、又幸福だった事はない。純情を裏切られた女は死ぬというが、男であっても私も初めて純情を破られたのである。感覚を失った人間の様に当てもなく市をさ迷い歩き、夜になっても自分のベットに帰るのは恐ろしかった。死ぬ事を考え、ライン河のふちへ出た。水流は早く、対岸のポプラの並木は私をまねいているようだった。水は或時は蒼く、或時は緑や褐色に流れていた。泡立った波は深みへ深みへと引き込む様にたたんでいた。とび込めばもうそのままだったろう。が、何日かさ迷った後どうせ死ぬなら、一度念願していたケルソのエルンスト・ベルトラムに会って見たいと思った。

つまり、これが芳賀檀の「現状反抗」、反権威、反帝大の正体であったのだ。すでに述べたように、芳賀はその出自（矢一の長男）や地位（東大副手・三高教授）からして、本来は日本浪漫派のなかでも正統的アカデミズムに最も近い人物だった。芳賀じしん、それを「血統」として自負していた。にもかかわらず敢行された芳賀の反抗、文学研究の刷新の提唱、破滅主義だったからこそ価値があったというのに、こんなにも低次元の椅子争いが裏に隠されていたとは興ざめだ、「ロマン主義とは、何時も青春が企てる凝固した文化に対する突破なのである」²⁹⁾という芳賀の言葉において、「凝固した文化」とはたんに帝大独文科の狭い世界を指していたわけか、と……。芳賀が「当時（戦前……引用者）は教授の命令は絶対であった」とわざわざ解説しているように、「学閥との闘争三十年」が発表されたころにはすでに、芳賀が言うところの「学閥」なぞほとんど意味をもっていなかった。いや、そもそもかつて帝大独文科が文化的な魅力をもったことがあったろうか。だからこそ、日本浪漫派として活躍した芳賀は、当時、帝大教授以上にドイツ文学を代表し、若い読者たちを魅きつけたはずである³⁰⁾。

それにしても、上記の文章は、芳賀によっては意図されなかったユーモアさえ湛えていて、なかなか笑わせる。文学的・内容的な表現と内容の空疎さとのズレは、それがわざと行われたものであるなら、たんなるケレンにしかなるまい。かつて保田興重郎は芳賀の文体を称揚し「彼に於いてのみ雄大な形式は、廃屋でなくして、その内容とに間隙がない」³¹⁾と言った。保田の言うとおりの言葉も内容も大仰な当時の芳賀の文章は現在ではほとんど読む気を起こさせないが、この見事な「間隙」をもち、それゆえ芳賀の「純粹」さを最も明確に映した「学閥との闘争三十年」だけが、今、唯一、鑑賞にたえる。

闘争のゆくえ

芳賀が相当に「困った」人物であることはもはや明白なのだが、ただし芳賀のこうした性質は今に始まったことではなかった。すでに註11)で言及した座談会「『日本浪漫派』を語る」（『国文学 解釈と鑑賞』の昭和44年8・

9月号)のなかで、司会者が、座談会には出席していない芳賀に関してこんな質問をしている。

あの方は、今でも悪名が高いわけですが、同時代の作家にはどうだったんでしょう。ドン・キホーテとかなんとか呼ばれていたようですが……³²⁾。

もちろん、さすがにかつての仲間だけあって、ここでは芳賀の「悪名」は芳賀の「純粋」さの証としておちょくられるにとどまった。

中谷孝雄 芳賀君には、ドイツ的心情みたいなもので、ものを書いていた。だからどうかすると日本の現実とちょっと食い違いが生じることがあり、何とかかとか言われる。

(中略)

檀 一雄 それから相手にしなきゃいいのに、十辺(一)君のようなのにムキになって怒っている。十辺君というのは、昔しょっちゅう保田さんの下宿に来てたよ、と言ったら、そりゃあいいこと聞いた、ってもう……。 (笑い) それからこの前も尾崎士郎さんの葬式の時なんか、松澤太平なんかと喧嘩することなんてないのに、ムキになってやるのでびっくりした。

若林つや 厳しいところがありますから。

平林英子 純粋なのね。

檀 一雄 戦うんだけど、戦う相手がね³²⁾。

これは、この座談会から見れば十年以上も前のことになる「学閥との闘争三十年」を念頭においた発言だろう。彼らの口調は、芳賀を寛容に見つめつつも、実は自分たちのグループから排除していることを示している。

しかし芳賀の憤怒の対象である進歩的文化人たる中島健蔵となると、そもそもこうも寛容ではない。中島は『回想の文学』に昭和13年9月7日の日記

を引用しながら、当時の芳賀檀の姿を浮かびあがらせてみせる。

腹がへっていたのですし屋の「久兵衛」へ行く。歌人岡山巖が社中の人々といた。芳賀檀の噂が出て、「ああお坊ちゃんでも困る」というと、向うのなかまの女の人が、「あなたこそ……」と笑う。ぼくの愛すべく悲しむべき顔貌についていったらしい³³⁾。

中島と芳賀とは同い年で昭和初期にはともに東大の副手をしていたので（中島は仏文の副手）、ごく若い時からの知り合いである。帝国大学新聞の昭和11年6月15日号には、中島の新著である『現代文芸論』に対する芳賀の好意的な書評が載っているくらいで、二人の関係は悪くはなかった。というより、そこには、同世代の者がもつ一種の仲間意識があった。また、帝大文学部のなかでもジャーナリズムとの接触が多い者として、中島に対して連帯感をもっていたのかもしれない。

ところが、中島の記述の仕方によれば、二人の考え方に決定的な違いが出てきはじめたのは、昭和12年に「新日本文化の会」が発足し、芳賀も保田興重郎とともにその一員になったところである。「新日本文化の会」は、文芸懇話会という、当時内務省警保局長であった松本学が文化統制を目的として文筆家たちを集め作った会が発展的に解消しできたものであった。会の出自と名称から明らかなように、日本文化の称揚によって新しい国粹主義を提唱しようという国家の魂胆に、文化人たちが乗ったのである。中島は、この「新日本文化の会」に猛烈に攻撃されたと告白しもある。1938年8月22日の日記をみてみよう。

河出書房から出した「知性」という雑誌に「新日本文化の会」（松本学、佐藤春夫、中河与一、林房雄等の提唱によってできた団体。）なるものの一部が猛烈に突っかかってくる。東京で林房雄や芳賀檀とけんかしてきたところだが、今度の「改造」では、杉山平助がかなり立てている。（中略）

三木清を中心として、七、八人の有志が、後藤文夫などのやっている昭和研究会（近衛首相のブレイン・トラストと自称するもの）で「文化研究会」を開いている。それにぼくが参加していることも、芳賀檀あたりには筒ぬけだ。亀井勝一郎あたりから洩れるのだろう。（中略）

すすめられて断るのがめんどうだから「文学界」の同人になったところ、林房雄が、「新同人中島健蔵は、今に警保局を動かして新日本主義を弾圧するそうだ、」云々と書いた。先日芳賀と酔って議論した時の冗談が、やはり筒ぬけなのだ。サンセリテを欠く男（説明を要するが）には注意しなければならない。林の冗談も、もう苦笑以上に不愉快だ³⁴⁾。

ここで挙がっている様々な雑誌や団体の名前は、国家による文化統制が厳しくなっていくなかで国家とどう折り合いをつけながら、しかし完全に支配されることなく、どのように生きうるかという問題に、かつて文化人たちが対決させられた過去を思い出させる。そして『文学界』がそうであったと言われるように、日本の場合、不思議な呉越同舟が生まれた。戦後の視点から眺めれば、そこでは、体制に対する抵抗と協力とが、批判と便乗とが必ずしも明確に分かれていなかったことが目につく。この曖昧さは、日本ファシズムのなかの文化人やインテリの在り様を考える上で重要なポイントである。

中島健蔵の記述が試みる、抵抗者と協力者との差異化がはたして成功しているかどうかはともかく、ここで芳賀の動きまわる姿が妙にはしゃいで嬉しそうに描かれてしまっているのは、中島の計算外のことだったかもしれない。中島の態度が緊張気味なのは、たとえば中河興一が戦時中文筆家たちのブラックリストを作成して当局に提出したという話があるように、それ自体としては現在でも見られる人間関係の対立や仕事上の競争意識が、そのまま政治へともち込まれ、生命を脅かす場合もあるという状況だったからである。

しかし、芳賀はもっと「純粹」で鈍感で、そして「お坊ちゃん」だった。中島が、芳賀におけるサンセリテ（sincérité 真率さ）の欠如が「説明を要する」と言っているのはこういう意味である。芳賀には何の陰謀もない（故

に、もっとやっかいである)。芳賀としては「文学」や「文化」という重要な問題で、文学者たちのあいだを飛びまわるのが嬉しくてしょうがないだけなのだ。芳賀のはしゃぎぶりは、彼らが実は一つ穴のむじなであるという状況をあぶりだしてしまふ。『古典の親衛隊』には次のような言葉があった。

僕は外国から帰って来て一番淋しく堪え難かったのは日本の文化と精神風景の余りに貧しいことであつた。ああいう時、日本の文学者が先頭に立たない筈がないと思っていた。芸術家というものはどんなにでも大胆に計画し、追放されてもよいのではなかろうか。芸術家は嵐であつてはいけないのか。芸術家とは苦悩のする祝祭ではなかったろうか。恰も其の時、折りがあつて、私は日本の文学者と作家が一堂に会するのを見ることが出来た。久米（正雄）氏があり、豊島（与志雄）氏あり、徳田秋声氏があつた。私はただ其の人達を見ただけであつたけれども深い喜びに打たれた。何故なら其処に集まつた人達は、日本のどの社会の人達よりも真摯で美しかったからである。而して兎に角ここに最も深く生き最も考えられているのだと感じた。其の端的な喜びに誤り等というものは全く考えられない。而して其の時僕はひそかに決心したのである。日本にいる限り、この最も美しい社会で、種族の間に住んで、決して離れてはゆくまい。例えば彼等と敵対してもよいのである。最も真摯に生を考え戦われる所に何時も現在しようというのが唯一の私の慰めであつた。この喪失の時代に其の他の何によって生きることが出来よう³⁵⁾。

この部分も「学閥との闘争三十年」に描かれた具体的な情景に正確に翻訳できる。「ああいう時」とは、昭和8年春の出来事を指していた。

日本に帰るとすぐ久米正雄、三木清らが、組織していた「学芸自由同盟」に呼ばれ、藤原定氏と共にその書記となった。「ナチスに対する抗議」の集会がレインボー・グリルで開かれ、席上私はナチスがドイツの伝統の精

神に反するものである事を学的に立証し、久米正雄氏から賞賛の言葉をいただいた。次いで私は「帝大新聞」に「非ドイツ的ナチス」という論文を発表したが、これは木村教授の激怒を買い、「ドイツに学んで、ナチスの悪口を言うなら大学をすぐ止め給え」と思い切って叱られた。今副手を止めたら私の将来の希望は何もない。御わびし、ジャーナリズムの仕事は一切ならぬという教授の命令に服するより他に仕方なかった。

自由な文学者たちが集う（と芳賀が思っている）文壇の世界を、「偏狭」で「醜愚」³⁶⁾な（と芳賀が思っている）帝大独文科の世界と対比して称揚した芳賀は、自分や日本浪漫派を含めた「在野の」文学者たちと体制との関係についてはまったく無自覚なままだった。『古典の親衛隊』は、その書名も告げているように、すでに芳賀がナチス礼賛に変わっていたときに出版されたものであるが、「学芸自由同盟」における美しく輝かしい闘争の思い出は、それとは別個に語られねばならない。芳賀の「純粹」さは、ナチスの文化政策への抵抗も帝大との闘争も等価なものにする。こうして、芳賀はすべての闘争や抵抗を、そうとは意図しないで、あるいは、その正反対の意図をもって、引きずり下ろしてしまいうだろう。

ドン・キホーテ芳賀壇をめぐると、すべてが不快な喜劇に変化する。芳賀の戦後の闘争は「かつて文部省ドイツ留学生であり、戦時ジャーナリズムにのって活躍し、戦後も、ペンクラブ代表として渡欧した自己の存在についての意識を全く欠いた心情の吐露である」³⁷⁾と、山領健二は不快感をあらわにして語ったが、まことにそのとおりとしか言いようがない。すでに示したように、橋川文三も芳賀壇に対してだけ不快と軽侮を隠さなかった。中河興一のような讒言者でも、蓑田胸喜のような日本主義者でも、林房雄タイプの転向者でも、保田興重郎ほどのカリスマでもなかった芳賀壇の「心情の純粹主義」³⁸⁾が、戦後の文学者やインテリたちのあいだに引き起こす感情は、不快の一言につきる。

本稿は、その不快さのよって来るところを示したつもりである。

註

- 1) 丸山真男「日本ファシズムの思想と運動」、『現代政治の思想と行動』所収、1964、未来社、64頁
- 2) 丸山真男「近代日本の知識人」、『後衛の位置から』所収、1992、未来社、112頁。
- 3) 加藤周一「新しき星董派に就いて」(初出1946年)、『加藤周一著作集8』、1979、平凡社、25頁。
- 4) 加藤周一「戦争と知識人」(初出1959年)、『日本人とは何か』所収、1994、講談社学術文庫、213頁。
- 5) ところで、橋川文三は、わずか2歳年長にすぎない加藤周一と自分のあいだに「微妙な偏差と断絶」を見ている。「……私の(一高のときの……引用者)二、三年上級のクラスには、加藤周一、中村真一郎、白井健三郎などという人がいた。(中略)彼らもまた鮎川(信夫)と同じように、明晰ということを愛しヴァレリイやスタンダールに精神の方法を学びとることに練達した人々であり、絶望という知的方法をいち早く体得した人々であった。彼らはそのような意味で一つのスタイルをもち、一つの確乎たる内的言語をもっていた。私などはそうした人々に、一種の畏敬と嫌悪との入りまじる不思議な感情をいだいていた後輩の一人にほかならなかった。そして私たちの属する(戦中派の…引用者)『中期』については、加藤周一がいみじくも道破した『新しき星董派』という形容があてはまるような、そうした変調がこの二つの年代の間には見られるのである。」橋川文三『現代知識人の条件』、1967、徳間書店、196頁。
- 6) 『復刻版 文学時評』、不二出版、1986、19頁
- 7) 橋川文三、『日本浪漫派批判序説』、1965、未来社、8頁
- 8) 橋川、25頁。
- 9) 『復刻版 文学時評』、11頁。
- 10) 加藤周一、前掲書、21頁。
- 11) 日本浪漫派のメンバーたちが、芳賀の豪邸について、こんな思い出を語っている。
檀 一雄 編集会議みたいのがよかった。中谷さんの所だの、芳賀さんのところだのに寄って。
中谷孝雄 芳賀君のところにはよく集まった。
檀 いつ頃からでした。
中谷 芳賀君が入ってからだ。あそこの家は大きくて集まるのに都合がよかった。

保田 あそこは余裕があった。

平林英子 芳賀さん一人で住んでいて自由自在でしたよ。檀さんが二階へかくまってもらって、夜中に逃げ出したことがある。

檀 十一年か二年の頃ですね。

(中略)

檀 そう。そのまま居すわったんだ。そうしたら林（房雄）さんも一家をあげてやって来た。居候にも上には上があるもんですね。一家をあげて芳賀家に居候にやって来て、大酒は飲む、二階から放尿はする、豪快なもんでした。

「『日本浪漫派』を語る」（初出『国文学 解釈と鑑賞』昭和44年8・9月号）
『保田興重郎全集別巻三』所収，平成元年，講談社 362頁。

12) 芳賀檀「知性論（二）インテリゲンチャの崩壊」、『祝祭と法則』所収，昭和14年，人文書院，204頁。（なお，芳賀のものに限らず，引用文中の旧漢字・旧かな使いは改めた。）

13) 芳賀矢一『日本人』，昭和14年，富山房，211頁。

14) 桶谷秀昭『昭和精神史』，平成4年，文芸春秋社，398頁。

15) 橋川，前掲書，58頁。

16) 橋川，316－317頁。

17) 橋川，55頁。

18) 昭和9年に発行された『コギト』に掲載された「日本浪漫派広告」は次のような文面をもつ。「日本浪漫派は，今日僕らの『時代青春』の歌である。僕ら専ら青春の歌の高き調べ以外を拒み，昨日の習俗を案ぜず，明日の真諦をめざして滞らぬ。わが時代の青春！この浪漫的なるものの今日の充満を心情において捉え得るものの友情である。芸術人の天賦を真に意識し，現状反抗を強いられし者の集いである。日本浪漫派はここに自体が一つのイロニーである。」

19) 中野重治「第二『文学界』・『日本浪漫派』などについて」（初出1952年），
『中野重治全集第二十一巻』，1978，筑摩書房，250頁。

20) 橋川，64頁。ところでベルトラムは師ゲオルゲ同様，同性愛者であった。橋川のいう「高貴なる日本の騎士芳賀が，同じくゲルマンの騎士ベルトラムに邂逅する絢爛な魂の絵巻物」は，明らかにそのような色合いで描かれている。

21) 芳賀は独特の用語を数多く作り上げた。たとえば，芳賀はハンス・カロッサの Führung und Geleit を初訳したとき，邦題を『指導と信従』とつけた。この「信従」なども辞書にはない言葉である。この作品は，最近また翻訳出版された

が題名は芳賀のものを踏襲している。『ハンス・カロッサ全集第5巻』（1996、臨川書店）参照。

ドイツ文学者の山下肇は次のような当時の思い出を語っている。「芳賀氏がまきちらす神秘的な新造語はある独特な魅力をもって広まった。『出会』とか『祝祭』とか『決意』とか、そして『指導と信徒』という訳名も今では定訳となってしまったが、『信徒』とは『信徒』の誤りではないかと問合わせてくる新聞記者が今でもあるくらいに珍しいことばである。」（山下「カロッサと日本人」、『詩人の運命』所収、1957、書肆パトリア、89頁。）因みに、昭和11年2月17日号の帝大新聞に芳賀自身が書いた記事のなかで、さっそく「指導と信徒」と誤植されている……。

保田興重郎の思い出も引用しておこう。「芳賀は自分で言葉を作ってますな。芳賀の作った言葉は戦争中でも、政府や軍部の発表などにも随分使われたが、戦後もよく使われてますよ。今の人など無意識に使っている言葉のなかにもギョウサンありますね。戦争中は右翼がよう使った言葉を、戦後共産党が使ったりしますが、みな芳賀檀が作った言葉ですね。漢字を上と下とひっくり返して使ったりして、一寸斬新に聞こえますからね。何々を決意すると云う言葉使って、最初は何のことか判らんかった。戦争になったらどこでもみな使っていましたね。そう言った調子で芳賀檀は現代語をギョウサン作りしましたな。えらい功績ですわ。」
「日本浪漫派とその周辺」（初出『バルカノン』第8輯昭和33年8月）、『保田興重郎全集別巻四』、平成元年、講談社、102頁。

22) 芳賀檀「ピエタ」、『古典の親衛隊』所収、昭和12年、富山房、134頁。

23) ただし、芳賀檀もナチスの政権獲得直後はナチスの文化破壊を非難する立場にあった。本文の第4節でも触れるが、芳賀は、ナチスの焚書に抗議するために昭和8年に結成された「学芸自由同盟」に保田興重郎とともに参加し、かなり活躍したと伝えられている。また、昭和8年6月12日号の帝国大学新聞に発表された「非ドイツ的ナチス」という記事では、ナチス革命を「真の意味における、ドイツ主義への反逆であり、ニイチェのいわゆる『窒息的平均化』である」として激しく非難した。

帝大新聞に発表されたドイツ紹介の記事を順に追っていくと、芳賀の態度の変化が見て取れるだろう。昭和12年11月8日および15日号に載った「詩人と戦士とドイツ文壇の最近の動向」という記事は明確にナチス支持の姿勢を打ち出しているが、それまでは、ナチスの文化統制やトーマス・マンなどの文学者の亡命問題に関して、ナチスに対して否定的とも取れる発言を繰り返している。たとえば、

亡命作家の続出について、「ベルトラムはこの悲劇を半ば肯定し、悲しんでいる」(昭和11年2月17日号)というように報告するのである。

24) 芳賀「男を泣かしめるヒットラーの友情」、『文学報国』第六号(昭和18年10月10日)所収、『復刻版文学報国』, 1990, 不二出版, 26頁。

25) 芳賀「ハンス・カロッサ」, 『祝祭と法則』所収, 143頁。

26) 保田輿重郎は戦後の対談や座談会で、この「日本浪漫派転向説」をたびたび否定しているが、これに触れて、福田和也は次のように言う。「日本浪漫派内部には、特に亀井勝一郎による保田の転向伝説の流布があり、高見順は亀井の指摘に従って保田を『もと左翼』と断じている。くわえて保田の著作の中に、マルクス主義に関する論議やソビエトの旗を詠んだ和歌が散見されること、プロレタリアート文学者たちとの少なからぬ交友、初期『コギト』に保田輿重郎の親友である肥下恒夫がプロレタリアート文学とともとれる小説を書き、留学中の芳賀檀が過激なコミューン戯曲を書いていたこと等の事情から、保田も左翼的な意識をもっていたという憶測が働いてきた。」(福田和也『日本の家郷』, 1993, 新潮社, 118頁。)芳賀の手になる「過激なコミューン戯曲」を、筆者は未見であるが、確かに芳賀は昭和4, 5年ごろ労働詩やピスカトル劇場、左翼労働者劇に興味をもち、いくつかの論文を残している。芳賀「表現派より労働文学へ」, 東京帝国大学独逸文学研究会編『エルンテ』Nr1(昭和4年2月発行)所収。「新興ドイツの傾向について」, 『エルンテ』Nr3(昭和4年12月発行)所収。「伯林通信」, 『エルンテ』Nr4(昭和5年7月発行)所収。芳賀がカロッサ, リルケ, ゲオルゲに注目しはじめたのはベルトラムとの出会い以降である。

ところで芳賀は最晩年にも二冊の戯曲集を出版している。もっとも、芳賀は今では自分の書き物がほとんど誰にも読まれないことを自覚していた。「私のようにマス・プロとは縁がなく、読者やジャーナリズムに媚びる必要もない文学の追及者」こそ、売れる売れないなぞに関係なく作品が書けるのだ、と八十歳を越えてなお意気盛んな芳賀は後書きのなかで言っている。「併しこの作品が日本の読者に読まれるようになるのは、ゲーテが『ファウスト』第二部について云ったように、五十年後、百年後の読者になるかも知れない」。「私が書いた戯曲や詩は、瓶に入れて海に投じた、はかなく、的もない一つの『S・O・S』にすぎないのである」と……。芳賀『芳賀檀戯曲集』, 1982, 近代文芸社。『千利休と秀吉』, 1984, 村松書館。

27) 山領健二「日本浪漫派—亀井勝一郎」, 『共同研究 転向 中』所収, 1960, 平凡社, 276頁。

- 28) 被害妄想ということに関しては、太宰治のほうが芳賀の上をいく。戦時中、太宰の作品『右大臣実朝』を、芳賀が聞き間違えて『ユダヤ人実朝』と思い込んでいたというエピソードがあるのだが、その時、太宰は日本浪漫派の仲間が自分を陥れようとしているとひどい被害妄想になったという。（『『日本浪漫派』を語る』373頁参照のこと。）
- 29) 芳賀「ロマン主義について」、『民族と友情』所収、昭和17年、実業之日本社、139頁。
- 30) 芳賀の世代のドイツ文学者たちに共通の思いは、ドイツ文学研究が文学からいかに遠く離れてしまったかという嘆きである。芳賀の友人石中象治は、「文学は既に以前からもう考証の学ではない」（『古典の親衛隊』）という芳賀の言葉を引きながら、「虚心に省みてみると、われわれ外国文学研究者の多くが参考文献の臭いに充ちて、精神は窒息したものであったことを否定は出来ない」と言う。その状況のなかで芳賀檀の存在は希望の星である、と。「不十分に詩人たる者が文学の研究者になるという常識は、だから芳賀君の場合にはあてはまらないのである。」（石中象治「芳賀檀の神話の試み——『古典の親衛隊』について——」、東京帝国大学独逸文学会編『独逸文学』第二年第一輯所収、昭和13年4月発行。）芳賀の反帝大的態度が当時、同世代や若者には受け入れられやすいものであったことを強調しておきたい。ここで重要なのは、ナチス称賛がこうした反帝大グループ、正確に言えば、インサイダーのなかのアウトサイダー（芳賀は副手であったし、石中は学会誌の編者であった）たちによって行われたことである。確かに、しばしば非難されるように、木村謹治帝大教授はナチスに迎合的な態度をとったが、ジャーナリズムで積極的にナチス称賛をしたのは、帝大に対して少し精神的距離（もしくは反感）をもっていた者たちだ。これは高橋健二、吹田順助、高橋義孝にも当てはまる。石中象治は芳賀や高橋健二とともに最初のカロッサ全集の訳者でもあり、昭和14年には『ドイツ戦争文学』を出版した。

ところで、反帝大の態度は手塚富雄にもあったらしい。手塚は大学入学当時の思い出をこう語っている。「その時期にあらたに私が籍をおいた東京大学の文学部というところは、本来、私たちの考えていた文学とは無関係な場所であることが、すぐわかった。直接文学の蜜を吸うよりは、その蜜について書かれたおびただしい参考文献や煩瑣な議論に窒息せねばならなかった。」（『一青年の思想の歩み』、昭和29年、河出書房、53頁。）手塚東大教授はのちには芳賀の「新宿乱闘事件」の相手となるわけだが、芳賀と同年であり、戦時中の昭和18年に帝大の助教授になった。

- 31) 保田輿重郎「『古典の親衛隊』と『江戸文藝論考』」（初出昭和13年），『保田輿重郎全集第十二巻』所収，昭和61年，269頁。
- 32) 『保田輿重郎全集別巻三』，361頁。
- 33) 中島健蔵『回想の文学4』，1977，平凡社，114頁。
- 34) 中島，96頁。
- 35) 芳賀檀「保田輿重郎に」（初出1936年），『古典の親衛隊』所収，303頁。
- 36) 「型だけの教養，理解のない教養は人間を偏狹に醜愚にするだけである。」芳賀「文学と教養」（初出1937年），『古典の親衛隊』所収，228頁。
- 37) 山領，前掲論文，287頁。
- 38) 山領，274頁

Mayumi Haga oder Mechanismus der Vergessenheit

Rieko TAKADA

Resümee

Der vorliegende Aufsatz ist eine Vorarbeit, um eine nicht eindeutige Einstellung zum Establishment, die den intellektuellen Mittelstand des modernen Japan bezeichnet, zu analysieren. Dabei gilt mein Interesse zunächst den intellektuellen Diskursen über Mayumi Haga, einen repräsentativen Kritiker der "Japanischen Romantik". Ihr eigentümlicher Antimodernismus, der vom einfachen Japanismus zu differenzieren ist, konnte in der Kriegszeit vor allem verzweifelte Studenten faszinieren.

Die "Japanische Romantik" schien für junge Intellektuelle eine einzige Möglichkeit des inneren Widerstandes gegen die Wirklichkeit des Kriegs zu bieten. In einer solchen Situation genoß auch Haga als Übersetzer von Carossa und Rilke große Popularität.

Aber nach dem Kriegsende wurde Haga von intellektuellen Lesern vergessen oder sogar verachtet, während die "Japanische Romantik" selbst wiederentdeckt und rehabilitiert worden ist. Im Mittelpunkt meiner Darstellung steht, was sich hinter dieser Vergessenheit versteckt.

Nicht Hagas (fast komische) faschistische Behauptung, sondern sein falsches Selbstverständnis, daß er ein kritischer Außenseiter sei, irritiert uns. Haga hält uns sozusagen den Narrenspiegel vor, in dem

wir unsere Besessenheit sehen, daß wir als Intellektuelle gegenüber dem Establishment kritisch sein müssen, nicht affirmativ sein dürfen. Haga könnte sich selbst mit Recht einen kämpferischen Don Quichotte genannt haben.